

学校便り
平成24年度

とよのっこ

10月

長野市立豊野西小学校

美味しくできました全校飯ごう炊さん 縦割り班活動



豊野西小学校の特色ある教育活動の一つ全校飯盒炊さんが、10月3日行われました。毎年縦割り班で作っていることもあり、時間をかけずにカレーなどグループみんなで上手に作っていました。食事の後は、県の林務課の方にいただいた木の板を使って工作をしたり、元PTA会長の倉石さんと一緒に弓を作ったりして楽しみました。

実りの秋 5年生稲刈り



10月12日 6月18日に田植えをした5年生、約4か月かけて、待望の収穫を迎えました。みんなで植えて、草取りをしてやっと実ったお米です。元PTA会長の加藤さん・現PTA副会長の峯村さんの協力を得て、大収穫でした。

10月の取り組み 運動会が終わり、少し落ち着いて校内生活を送れるようにと、10月の生活目標は、「学校のきまりについて確認しよう～廊下歩行を守ろう～」に決め、取り組んできています。廊下の天井に下記のような標識を係で用意して、意識してもらうようにしています。

交通安全は、まず、校内の廊下歩行からと全校で取り組んでいます。



マラソン大会 11月14日(水)

11月14日(水)にマラソン大会を行います。(年間行事予定表では15日(木)になっていますが、学校の都合で変更しました。)それに向けて11月1日からマラソン旬間を設けて、学年クラスごとに、例年のように学校裏の農道を走ります。農作業等で農道を通られる方には、色々とお迷惑をおかけしますがよろしくお願いいたします。



5年生
10月
5日
安曇野
方面へ
社会
見学



豊野町運動会にマーチングバンド参加



3年生
社会見学
マルコメ
みそにて
10月
4日

10月 校長講話より

山中博士のノーベル賞の受賞についてお話ししたいと思います。iPS細胞を発見（これは、つくられたという方が適切かもしれませんが）したことを認められてのノーベル賞を受けました。今日はこのことについてお話ししたいと思います。

まず、iPS細胞について簡単にお話ししましょう。みなさんはアサガオや大豆を畑にまくと、やがて芽が出て花が咲き、実をつけることを知っていますね。サツマイモを小さく切っておいても、芽が出てサツマイモがつくられます。植物の一部を切って土にさしておくと、やがてそこから根が出て育っていきます。このように植物は体を切り取っても、元の体をつくり出すことができます。

動物ではどうでしょうか。トカゲは、捕まえようとしてこの長いしっぽをつかむと、なんとしっぽを切って逃げてしまいます。痛いでしょうけれど、逃げるためにはしっぽを切って身を守ります。でも、やがてしっぽは生えてくるのです。

私たちはどうでしょう。ちょっと転んですりむいてしまった時、しばらくして薄い皮ができてきて傷は自然に治ります。骨を折ってしまっても、時間がたてば元に戻ってきます。でも、腕を切ってしまったらどうでしょうか。トカゲのように自然に腕が生えてきません。いくら時間をかけても腕は元に戻りません。交通事故で体の下半分が動かなくなった場合、これも元に戻れないことが多いようです。それは、ヒトはトカゲのように切ったら元に戻るという仕組みを持っていないからです。

今回の iPS 細胞というのは、植物やトカゲのように体を作り出せるはたらきを持たせたものです。この技術が進めば、ベッドから起きられない生活をしている人も、元気に活動できるようになるかも知れません。目が見えなくて苦しんでいる人も再びきれいな景色を見ることができるようになるかも知れないのです。このように、病気やけがで失われた体を取り戻すことができる、まさに夢の技術です。その他にも iPS 細胞を使って病気や薬の研究もすごく進むといわれています。ここではお話ししませんが、これからみなさんが勉強して理解してください。今回発見された iPS 細胞についての簡単にお話ししました。

では、このノーベル賞を受けた山中教授とはどういう先生でしょうか。伝えられていることをお話ししましょう。子ども時代のこと。一生懸命勉強しました。それだけでなく、中学生のころから柔道やラグビーを続けたスポーツマンでした。今でもマラソンをやっているとのこと。勉強や研究だけをやっていただけではなかったようです。スポーツを通して、体力や集中力を得てきたと聞いています。中学生の時には生徒会の役員をやり、周りの人とも積極的に関わりを持っていたとのこと。そういう経験を経てお医者さんになろうとしました。

山中先生のお話では、お医者さんになってからも思うようにはいかなかったようです。患者さんを助けたくて手術をしても、思うとおりにいかないこともあったり、治す方法が見つからない重い病気やけがの患者さんにも多く出会ったりして、自分の限界を感じました。「自分にはもっと別のことができるのではないか」、思い切ってお医者さんから研究者を目指して大学に入り直します。研究者になった後は、人の3倍研究しようと、夜も寝ないで研究に励んだそうです。やがてアメリカの研究所でも働きます。何年かの続けた後に日本に戻ってきました。そこでも苦勞したようです。研究を進めるには十分な施設がありません。研究に必要なネズミの世話まで自分でしなければいけなくて、研究も進みません。また、お医者さんに戻ろうか、迷いや悩みもすごく大きかったと述べています。そんな苦しい生活の中から先生にチャンスがやってきます。厳しい研究生活をする中で、iPS細胞に関わる世紀の研究に成功します。この研究が拓く未来のすばらしさについては、最初に述べた通りです。

ノーベル賞をもらう2日前、山中教授は全国の校長先生方を前に、お話しをされました。先生は2つ心がけていることがある。「一つは、1ヶ月後はどうなるか、1年後はどうなるか、という見通し ビジョンを持つこと。」「2つめは、一生懸命はたらく(勉強する)こと。」とお話しの中で述べられたそうです。

今回のノーベル賞の受賞に際して私は思いました。1つはこのようなすばらしい研究を生みだしたのは、山中教授を育て支えた家族やお家の方や学校、大学。そして研究をお手伝いした人たち。いろんな人たちが先生を助けました。日本のすばらしいところがこのような立派な研究者を生み出したのだらうと思いました。

2つめは、科学技術はすばらしい未来をもたらしてくれる。けれども、時として大きな厄災をもたらすかも知れません。だから、これからの生きていくみなさんには、更に深く幅広く考える人に育ってほしいなということです。

研究の成果は20年後にはもっと大きく花開いていると思います。その時代の研究を支える人たちは、今は日本のどこかの学校の小学生として勉強している。この中にもすばらしい仕事を無しげのお友だちがいるかも知れません。先生がおっしゃった「ビジョンをもつことと一生懸命勉強すること」はみなさんにも必要なことではないでしょうか。

秋は、深く考えるよい季節です。自分の将来の目標、自分の勉強の仕方など振り返って、更に努力する。そんな風に生きていけたらいいなと先生は思いました。

